

社会性を育むために

一言語表現力の育成－

鹿児島純心女子大学 国際人間学部 ども学科
教授 獅子目 博文

はじめに

公立高等学校の国語科教員を20年間、その後、教育行政や公立高等学校長を経て、平成20年4月から鹿児島純心女子大学で教職課程の講座を担当している。受講者は、少ない講座で20人程度、多い講座では100人に上る。意見や発表を求める私の質問に、学生たちは、どの講座でも椅子に座ったままで答えた。受講者の多い講座では、大勢に埋もれて誰が答えているのか分からない。声が小さい、ぼつんと単語で答える、いかにも自信なげである。大きな声で積極的に発言する学生がいても、飛んでくるのは単語が多い。

教員採用試験に向けての面接の練習では、熱が入ると丸暗記が始まる。「答える項目を決めて、実際の場面では質問に応じて項目をつなぎなさい」と指導するが、自信が持てないでいる。「学校で、どのような言語活動を行ってきたのだろうか」、そんな思いとともに、ある記憶が蘇った。地方の普通科高校で、校長室での最終的な面接練習の折、突然、男子生徒が泣き出した。理由を尋ねると、喉に手を当てて「言いたいことが、ここまで来ているんです。でも、それをどう表現したらいいのか分かりません。自分が悔しくてなりません」としゃくり上げながら言う。次の日の職員朝礼で、私は「本校で3年間学んだ生徒に、こんな思いをさせていいのだろうか。国語科だけでなくすべての教科で、いや学校の教育活動全体のなかで対応してほしい」と話した。

最後の勤務校は鹿児島市内の普通科高校だった。国語の授業を覗いてみた。研究授業ではない、普通の授業である。50分の授業の間、生徒は自分の考えや意見を椅子に座ったままでしゃべっている。教師は小さい声を聞き取るため、生徒の近くまで歩み寄る。他の生徒に二人の会話は聞こえない。近くの生徒に「いつも、座ったままで答えているのか、それはいつからなのか」と尋ねると、「いつもです。中学の時からです」と答えた。授業が終わって、教師に理由を聞くと「赴任した当初は違和感がありまし

たが、ほかの先生方もそうしているし、時間がかからなくて済みますから」と答えた。

九州地区の高等学校国語教育研究大会が、ある県のS高校で開催された。有数の進学校である。古文の授業では、指名された生徒が立って答えていた。主語と述語を呼応させ、はっきりした声で答える。教師と生徒の間で軽妙なやり取りが行われ、そこに他の生徒たちも加わる。次に現代文の授業を覗いた。生徒は座ったままで答えている。単語で答える。声が聞こえない。教師が、最前列の生徒3人をそれぞれ指名して、教科書を朗読させた。3人とも座ったまま読んでいる。朗読の声はほとんど聞き取れない。その後、これらの体験を県内・県外の高校長会等で折に触れて話題にしたが、「私の学校も同様です」という答えが多かった。

コミュニケーション能力の育成が社会的要請⁽¹⁾となっていくなか、学習指導要領改訂に当たって中央教育審議会は「言語力育成協力者会議」⁽²⁾を設置した。平成19年8月の報告書案「言語力の育成方策について」では、「子どもを取り巻く環境が大きく変化するなかで、(中略)言語で伝える内容が貧弱なものとなり、言語に関する感性や知識・技能などが育ちにくくなってきている。このため、言葉に対する感性を磨き、言語生活を豊かにすることが大変強く求められている。(中略)さらに、社会の高度化、情報化、国際化が進展し、言語情報の量的拡大と質的变化が進んでおり、言語力の育成に対する社会的な要請は高まっている」とした上で、「教科を横断した指導の充実」が必要であるとした。学習指導要領は「言語活動の充実」を主な改善事項の一つに掲げ、すべての教科において、具体的な活動として充実を図らなければならない重要な課題であるとした。

平成22年3月に文部科学省が刊行した『生徒指導提要』⁽³⁾は、「教科指導における生徒指導の推進の在り方」として5項目を掲げ、その一つに「言語活動を充実させ、言語力を育てる」を挙げて、言語は豊かな感性や情緒の基盤となるもので、論理や思考など知的な活動を支え、コミュニケーションを図る重要なツール(道具)であり、自立的な活動や協力的な活動は言語活動によって支えられている。生徒指導を充実させ、よりよい人間関係をつくるために、教科において児童生徒一人一人に確かな言語力を育成することは欠かせないとしている。

かつて、本県の離島をはじめ大規模校や小規模校等、多くの小学校を訪問したが、どこにも同じ授業風景があった。質問に対して我先に手を挙げる。指名された児童が起立する。主語と述語を呼応させて「～だと思います」と大きな声で答える。すかさず他の児童たちが「そうです」と応じる。各学級には「はっぴょう話けい」⁽⁴⁾が掲示してあった。「指名されたらハイと返事してその場に立つ」、「発言は友だちの方を向いて、適切な声の大きさで話す」等、全校的な取組だった。Y小学校では、学習が成立するための「ルール、態度、基本的な態、発表話型」等の総体としての「学習コード」を作成し、

「よりよい学び合いをつくる学習コード」と称して「全学年全学習活動を通して、共通理解の下、実践されるべきものである」としていた。これらは、『生徒指導提要』が掲げる「言語活動を充実させ、言語力を育てる」を含む5項目の具体化への取組であると考ええる。

私は、授業で立って発表させることは、公的場面における言語表現力の育成を日常的に図り、教育の目的である人格の完成と社会の形成者としての資質の育成に寄与するものと考えている。最初に「なぜ話すことなのか」、そして「なぜ公的場面なのか」について私見を述べる。次に、学習指導と生徒指導の一体化に努めている小学校の取組が、教科担任制をとる中学校・高等学校ではどうなっているのか、その現状と問題点について述べる。教科指導の基本的な実践形態としての授業における「発表の仕方(させ方)」について、本学の学生と中・高の教員の双方に「立って答えていたか(答えさせているか)、座って答えていたか(答えさせているか)」、併せてその理由についてもアンケート調査を実施し、実態を分析したうえで、特に教員の意識を通して授業の在り方について考察する。

I. 話すことと公的場面について

学校では、夏休み等の課題としての作文や読書感想文、あるいは課題研究や小論文、そして講演等に際してはメモをとらせる等、「書く」指導が日常的に行われている。しかし、「書く」ことを苦手とする生徒は多い。私は、小論文指導の際には、構想をまとめさせるため、最初にテーマについて互いに論議しあうようにさせてきた。友達と意見交換をしながら考える。間違ったら言い直しをすればよい。音声言語によるやり取りの中で、相手の考えに触発されたり、気付かなかったことに気が付いたりする。新しい発見が生まれる。何よりも話題が「私」という特殊な世界から「公」という一般的な世界へと広がっていくし、客観性・普遍性を追い求めていくようになる。まさに「三人寄れば文殊の知恵」である。授業で意見を求める場合にも、しばしば隣同士で話し合いをさせた上で発表させた。「書く」という行為は、「書く内容」がある程度、整理された後の行為である。人が生を受けて、言語によるコミュニケーションが「話す」ことから始まることを考えれば、「言語活動の充実」に当たって「話す」ことの重要性にもっと着目すべきではなかろうか。

次に、なぜ公的場面なのか。日本人は古来、「晴れ」と「褻」、「非日常」と「日常」、そして「公」と「私」を区別し使い分けをしてきた。しかし今日、「私」が「公」を侵食している。電車の中での化粧や公共の場での携帯電話使用、いわゆるモンスターペアレントの言いがかり等、枚挙に暇がない。「日本生徒指導学会第10回大会」⁽⁵⁾のパネルディスカッションで、コーディネーターの大阪樟蔭女子大学の森田洋司氏は、冒頭「社会全体が

私事化」という大きな流れになっていると述べ、「〈全体化－個別化〉、〈私事化－公事化〉という対立図式の中で、公共への意識が薄れて個人が欲求を前面に押し出すようになると、集団や他者の思いを意識しなくなるという弊害も出てきます。コミュニケーション能力の低下や欲求・感情のコントロールがうまくできない子やそれに伴う問題行動も出てきます。こういった特徴は、かつては非行少年の特性でしたが、今はこれが子どもたち全般に表れてきています」と警鐘を鳴らした。私的場面とは私事にかかわる場面である。一方、公的場面とは公事にかかわる場面であり、そこで取り上げられる内容や話し方は公的性格を持ったものでなければならない。しかし今日、公的場面に私的な特殊事項が入り込んでいる。職員室で、児童生徒が教員に「タメ口をきく」状況に象徴されるように、私的場面における私的会話が、公的場面における公的会話を日常的に駆逐していけば、社会という公的場面における言語表現力を、学校教育の場で培うことは望むべくもない。「教育基本法」が第1条で教育の目的として掲げる「人格の完成」と「平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質」を育成するためには、社会生活の場で自己実現を図る力を育むことが必要であり、学校において、公的場面で働く言語表現力の育成が求められる。

「財団法人 日本青少年研究所」⁽⁶⁾が、日本・米国・中国・韓国の4カ国に実施した「高校生の勉強に関する調査 報告書」がある。それによると「授業中、きちんとノートをとる」生徒は男女ともに日本が一番多い。一方で、「授業中、積極的に発言する」については、男子が最下位、女子も韓国の次に低い数値である。授業形態においても、「教科書の内容をきちんと教え、覚えさせる授業」が好きと答えた生徒は日本が一番多く、逆に「生徒によく発言させる授業」が好きという答えは最下位である。「どのような授業が多いか」はそれを裏付けており、日本では「教科書の内容をきちんと教え、覚えさせる授業」が多く、「生徒によく発言させる授業」が少ないという結果が出ている。授業は公的場面であり、そこで取り上げられる内容や言葉は公的性質を持つものでなければならない。児童生徒に、自分が公的場面に置かれており、公的な内容にかかわっていることを意識させる授業でなければならない。そのために、教師は「授業中、生徒が積極的に発言する」取組を行うことが必要であり、その一つが「立って発表させる」ことであると考えられる。

Ⅱ. 調査の概要と結果

1. 調査の概要

(1) 調査対象者

- A 本学の学生(教職を志望する2、3年生 83人)
- B 鹿児島市内及び他市の中学校・高等学校の教員(中学校4校102人・高校3校103

人)

C 鹿児島県総合教育センター研究発表会参加教員(小学校68人・中学校46人・高校10人・特別支援学校17人)

- (2) 調査期間 A 平成21年10月9日 B 平成22年1月
 C 平成22年1月29日

(3) 調査方法

いずれも無記名。Aは教職の講義で配布し回収。Bは無作為で学校を抽出し、校長に趣旨を説明して依頼し、後日、回答郵送。Cは所長に趣旨を説明して依頼し、後日、回答郵送。

(4) 調査内容

Aについて

「公的場面における言語表現力の育成」に関するアンケートについて(依頼)

学校の授業で先生の質問に答えるとき(「はい、いいえ」ではなく、自分の考えや意見を発表するとき)、あなたは立って答えていましたか、それとも椅子に座ったままで答えていましたか。ア～オから選んで下さい。また、選んだ理由も書いて下さい。

- ア ほとんど立って答えていた イ どちらかという立って答えていた
ウ ほとんど座って答えていた エ どちらかという座って答えていた
オ その他

B、Cについて

「先生の授業で質問をして答えさせるとき、」以下、「答えて」を「答えさせて」に変更し、Aと同趣旨の質問にした。

(5) 倫理的配慮

対象者へは、研究目的、調査内容と調査方法、回収方法、本調査への協力は自由意思であること、個人は特定されないこと、B・Cについては学校名も特定されないこと、データは研究以外の目的では使用しないことを説明した。研究結果を、Aは講義で発表し、B・Cは郵送した。

2. 調査の結果

(1) 本学の学生について

A 本学の学生(教職を志望する2、3年生 83人) (%)

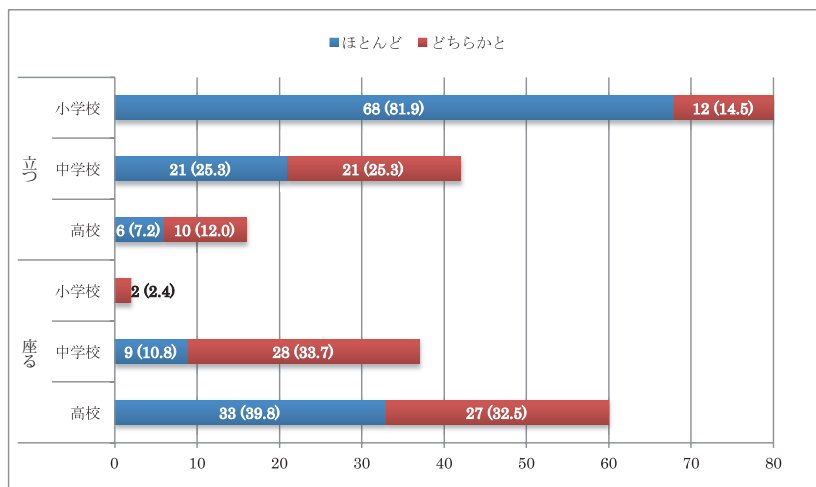


図1 注 「その他」(小学校1人 中学校4人 高等学校7人)は、グラフから省いた。(%)は「その他」を含めた数値。

「ほとんど」と「どちらか」とを合わせると、小学校は「立つ」が80人(96.4%)、中・高と進むにつれて42人(50.6%)、16人(19.2%)と減少する。「立つ」理由で多いのは、「学校の教育方針や周囲の影響」によるものである。小学校では、「立つ」ことが「学校のきまりであり、学校全体での取り組み」である。したがって「みんながそうしているから」とか「立つのが当たり前だったから」という回答が多かった。一方、わずかなではあるが「自分の意見を公的な場で発言する練習」と積極的に意義を認める回答のほか、「発表スタイルの刷り込み」という回答もあった。中学校では、学校としての取組は一部であり、「立つ」生徒の多くは、個々の教師の指示に従っているようだ。なかに「小学校からの習慣」、「考えをまとめる練習」という回答もあった。高校では、学校としての取組を聞かないし、「立つ」ことを指示する教師も中学校以上に少ないようだ。

「座る」については、「ほとんど」と「どちらか」とを合わせると、小学校は2人(2.4%)、中・高と進むにつれて37人(44.6%)、60人(72.3%)と増加する。小学校の2人は極小規模校出身者であった。「座る」理由で多いのは、教師の指示や周囲の影響によるものである。中・高では、教師が「座って答えてもいい」と指示したり、何の指

示もなかったりするなか、「みんながそうするから」という理由で座って答えている。「恥ずかしいから」、「正解なのか不安だから」、「面倒くさいから」といった回答が、中・高と進むにつれて多くなるのも問題である。授業の形態に触れた回答も多い。「立って答えさせる授業が少ない」、「中学校になって発表する機会が急に減った」とか「高校での質問は単発的、正解を求める形態」といった回答が多く、先に示した「日本青少年研究所」の調査結果と符合する。「時間を短縮できるから」と、教師の意図を汲んだ回答もあった。なお、「その他」(小1、中4、高7)を選んだ理由は、教科や先生によるというものだった。

(2) 本県の教員について

学生の調査から、小学校については学校の教育方針として「立つ」が指導されており、中学校、高等学校と進むにつれて「座ったまま」の授業が増えていくことが分かった。そして、その理由から、教師の指示や非指示、発表を恥ずかしがる生徒たち、授業の形態等の課題が見えてきた。当の教師はどのように考えているのか。鹿児島市内と他市の中学校・高等学校を無作為に抽出して調査(B)をした。また、鹿児島県総合教育センター研究発表会に県内各地から参加する教員について同様の調査(C)をした。

B、Cそれぞれについて、最初に、「立たせる」のか「座らせる」のか、その現状を示し、さらに、その主な理由をまとめる。なお、学校、学校種によって回答者数が異なるため、B、Cの数値は%で示す。(資料1、2)

B 鹿児島市及び他市の中学校・高等学校の教員(中学校102人・高校103人)

		校名	生徒数	回答数 / 教員数(回答率)			校名	生徒数	回答数 / 教員数(回答率)	学科
中 学 校	鹿 児 島	O	674	29/38(76.3%)	高 校	鹿 児 島	X	951	48/60(80.0%)	普
		P	823	36/47(76.6%)			Y	506	14/63(22.2%)	普・専
		Q	320	20/22(90.9%)						
	他	R	201	17/17(100%)		他	Z	922	41/59(69.5%)	普

図2

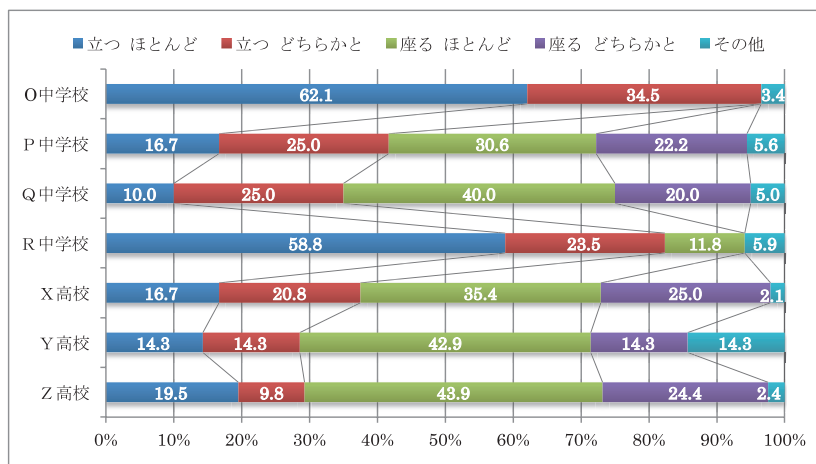


図3（資料1）

「立たせる」については、「ほとんど、どちらか」とを合わせると、O中とR中が、それぞれ96.6%（28人）、82.3%（14人）と比率が高い。一方、P中とQ中は、それぞれ41.7%（15人）、35.0%（7人）と低い比率である。O中とR中は、学校の教育方針として「立って発表させる」を実践しており⁷⁾、P中とQ中は特別な取組をしていない。

高校は3校ともに「立つ」を選択する教員は少なく、X高37.5%（18人）、Y高28.6%（4人）、Z高29.3%（12人）である。「その他」は、「発問や状況による」というものだった。

C 鹿児島県総合教育センター研究発表会参加教員141人 （小学校68人、中学校46人、高校10人、特別支援学校17人）

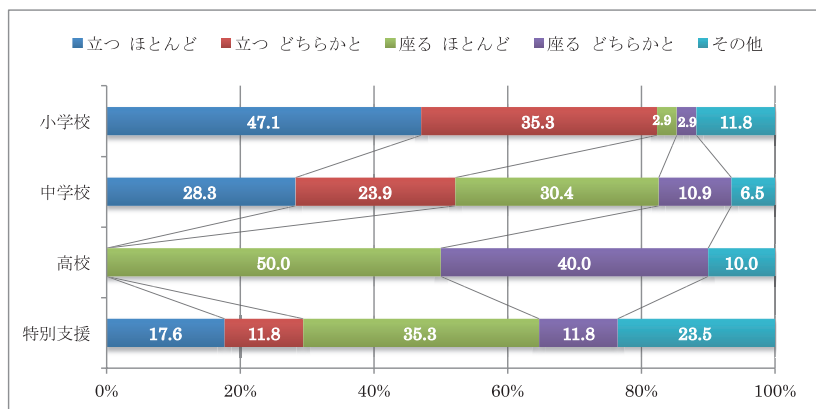


図4（資料2）

特別支援学校は障がい種を考慮する必要があるため、分析から除外する。小・中・高においては、数値は異なるものの、これまでの調査結果A・Bと符合する。小学校は、「ほとんど」、「どちらかという」とを合わせると「立つ」が82.4%（56人）、「座る」が5.8%（4人）である。先に示した「A 本学の学生」では「立つ」が96.4%、「座る」が2.4%であった。いずれも「立つ」が圧倒的に多く、「座る」が少ない。また「B 中高教員」と同様に中・高と進むにつれて「立つ」が減少し、「座る」が増加する。

「その他」は、Bと同様に「発問や状況による」というものだった。

次に、中学校と高校について、A（本学の学生）、B（中・高教員）、C（教育センター研究公開参加の中・高教員）を比較する。

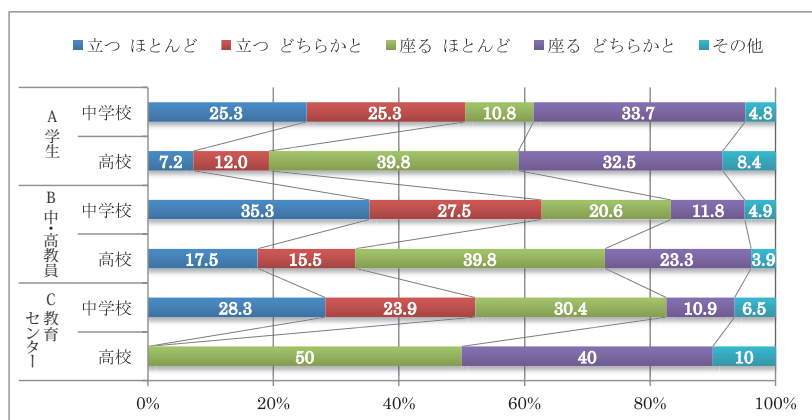


図5

A（学生）、B（中・高の教員）、C（センター参加の中・高教員）ともに、中学校よりも高校が「立つ」が少なく「座る」が多い。中学校では、「ほとんど」、「どちらかという」とを合わせると、「立つ」が50%から60%台。高校では、Cで「立つ」を選択した者は0、A・Bでは「立つ」がおよそ20%から30%台である。一方、「座る」が、中学校では30%から40%台、高校ではA・Bが60%から70%台、Cが90%である。明らかに、中学校から高校へと「立つ」が少なくなり、「座る」が増加することが分かる。小学校、中学校、高等学校と進むにつれて、なぜ「立つ」が少なくなり、「座る」が増えるのか。以下、教師のアンケート結果から、「立って発表させる理由」、「座って発表させる理由」について、教師が考える「発表する側」、「聞く側」、「授業する側」、それぞれの理由を整理した。

① 立って発表させる理由

ア 発表する側にとって→人前で自分の考えを伝える力を身に付けることができる。

- ・技術面から→発表内容や方法等の工夫
- ・精神面から→自覚や責任、意欲の喚起

イ 聞く側にとって→人の話を聴く力を身に付けることができる。

- ・技術面から→話し手の意図を理解する力の獲得
- ・精神面から→他者の尊重、協働意識の涵養

ウ 授業する側にとって→教師としての資質向上を図ることができる。

- ・教科指導力の向上
- ・学級経営力の向上

② 座ったままで発表させる理由

ア 発表する側にとって

- ・自然な意見を引き出すため(かしこまらせない)
- ・消極的な生徒への配慮

イ 聞く側にとって

(回答なし)

ウ 授業する側にとって

- ・時間短縮のため

まとめ

「立って発表させる理由」として先に掲げたア～ウは、「座ったまま」でもできないことではない。しかし、そのためには学級に共感的人間関係が醸成され、生徒一人一人が自己存在感を持って主体的に自己の可能性を開発しようと努めることが前提にならなければならない。それが実現されれば、あるいは実現への努力がなされているのであれば、何も「立つ」「座る」という形式にこだわる必要はないと考える。しかし、「座ったままで発表させる」理由から、生徒たちをどう社会化するのかという視点は見えてこない。生徒は「恥ずかしいから」という理由で「座ったままで」発表し、教師はそれに追従して、「つぶやきを大切にしたいから」を理由に、他の生徒(聞く側)への配慮をせず、一方で、時間短縮という効率を追っている。学生の「恥ずかしいから」には、「間違っただけに友達に笑われたら」とか、正しく答えたとしても「格好をつけていると思われるのでは」といったような、周囲を意識した様々な思いが交錯している。その結果、その他大勢の中に身を潜めるようにして、誰が答えているか分からないような小さな声で、しかも単語でぼつりとつぶやく。教師は、そんな生徒のつぶやきを大切に座ったままで答えさせる。声が聞き取れないから生徒の近くまで歩み寄る。そこで交わされる言葉は他の生徒の耳に届かない。それどころか、生徒が答えなければ、次々に当てていく。「はい次、はい次」という教師の声が、うつむいている生徒の頭上を通過

ぎていく。

「和を以て貴しとなす」に象徴される日本人の美德としての協調性が、一方で島国、閉鎖的な村社会の中で、異論を許さない空気を作り出してきた日本、併せて生徒は、いじめが多発する中「出る杭」を恐れて同一性から抜け出せないでいる。意識の高い一部の生徒であればともかく、ほとんど義務化された高校、そして大衆化していく大学において、どんな場面でも、そしてどんな相手であろうと、堂々と自分を主張できる人間を育成するためには、それを習慣化する取組が必要であろう。教師が意図的・意識的に、そのような場面を演出することが大切である。

そこで、以下の観点から「授業で日常的に立って発表する」ことを提唱したい。

① 生徒の公的場面における言語表現力や聴く力を育成する。

立って発表することは、発表者はもとより他の生徒たちにも、自分たちが公的場面にあることを意識させる。発表者は発表者としての自覚と責任の下に、みんなに分かるように発表内容や方法に工夫を凝らす。他の生徒たちは発表者に注目し、内容や意図の理解に努め、自分の考えを組み立てる。言語力の育成が図られる中で、テーマが共有され、一人一人の生徒に居場所がつけられる。生徒は共に学び合うことの意義と大切さを実感しながら、主体的な学習態度を培う。『生徒指導提要』は「教員は児童生徒の発達段階に応じて、段階的に社会的存在としての人間の「私」性の側面のみならず、「公」性をも併せ持っていることを意識させることが重要です」^⑧と述べる。授業で日常的に立って発表させることは、生徒を社会的な自己実現へ導く生徒指導の機能である。

② 教師の学級経営力や教科指導力を高める。

授業で、日常的に立って発表させることは、一方で教師の力量を高めることに寄与する。発表者が堂々と自分の考えを述べ、周囲の友達が真剣に耳を傾ける授業づくりのためには、学級に「共感的人間関係」「自己存在感」「主体的な学び」を醸成するなど、生徒指導力を基盤とする教師の学級経営力が必要である。学級に発表者を揶揄する生徒はいない、もとより教師の口から「こんなことも分からないのか」といった人格を否定する言葉は出てこない。授業を通して生徒一人一人の可能性の開発を援助する生徒指導が行われるのである。

一方、答えさせる努力は教師の教科指導力向上に寄与する。「立たせたら時間がかかる」というのは、答えに導くために時間と努力を(生徒も教師も)必要とするからである。どうして答えられないかを推し量り、質問の切り口を変えたり、難度を下げたり上げたりすることは、教師が生徒理解を深めつつ、教科の指導力を高めていくことである。

最後に、授業は生き物である。同じ教科、単元、内容を扱ったとしても、同じ授業

は存在しない。教科が違えば様々なスタイルが生まれる。しかし、共通するのは、教師は脚本家であり、監督であり、演出家であり、そして出演者でもあるということ、同時に児童生徒も出演者の一人だということである。決して観客ではないし、傍観者にしてはならない。児童生徒をどう動かすかは、まさに教師の力量にかかっている。

A、B、Cの調査で「その他」を選択した教師がいる。アンケートの質問に(「はい、いいえ」ではなく、自分の考えや意見を発表するとき)と記したにも関わらず、「その他」を選んだ理由は「発問や状況による」である。詳細に理由を見ていくと、「意図、流れによって使い分けている」、「個人的な思いや考えを出させるときは座っていた方が答えやすくなる。立って答えさせるのは全体に広めるため」など、「形に縛られたくない、大切なのは中身である」という回答者の声が聞こえてくる。私も同感である。しかし、中学校・高等学校の現状は、これまで述べてきたとおりである。しばらくは、「公的場面における言語表現力の育成」、そのための「立って発表する」ことの意義を訴えていきたいと考える。

(注)

(1)「新卒採用(2011年3月卒業者)に関するアンケート調査結果」(日本経済団体連合会2011年9月28日)によると、各企業が採用選考時に重視する要素について「コミュニケーション能力」が80.2%(前年度81.6%)で9年連続1位である。また、「平成22年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査結果」(文部科学省平成23年8月4日)によると、小中高の暴力行為が増加しており、文部科学省は、その理由を「規範意識の低下」「感情を制御できない」とともに「コミュニケーション能力の不足」とした。

(2) 設置は平成18年6月から平成20年3月までの期間、「各教科等における言語力の育成」、「指導方法の改善」等、子どもの発達段階に応じた各教科等を横断した言語力について検討した。

(3)「まえがき」によれば「小学校段階から高等学校段階までの生徒指導の理論・考え方や実際の指導方法等について、時代の変化に即して網羅的にまとめた基本書」としてしている。昭和56年10月刊行の『生徒指導の手引(改訂版)』以来、30年ぶりの改訂版とも評される。

「第2章 教育課程と生徒指導」の「第1節 教科における生徒指導」の「2 教科における生徒指導の推進の在り方」として、次の5項目を掲げる。①授業の場で児童生徒に居場所をつくる ②わかる授業を行い、主体的な学習態度を養う ③共に学び合うことの意義と大切さを実感させる ④言語活動を充実させ、言語力を育てる ⑤学ぶことの意義を理解させ、家庭での学習習慣を確立させる

(4)学校によって、あるいは下学年用、上学年用として「発表話し合い」「発表話型」「発表の仕方」等、様々であるが、いずれも話し方や聞き方について簡潔に示されている。

(5)大会テーマ「生徒指導のターニングポイント、今、そしてこれから」2009年11月7日(土)兵庫県私学会館

(6)『高校生の勉強に関する調査 報告書』(財団法人 一ツ橋文芸教育振興会、日本青少年研究所 2010年4月) P11、13、20

(7)O中は、すべての学級で学習適応授業(学習の仕方についての授業)を実施している。R中学校は体育館に生徒を集めて「学習訓練」を実施し、そのなかで「発表の仕方」についても、生徒会役員が説明を行っている。

(8)「第1章 生徒指導の意義と原理」「第4節 集団指導・個別指導の方法原理」

資料1 中・高教員 ※ゴシックは「ほとんど」「どちらかという」との合計、()は%

	立つ		座る		その 他
	ほとんど	どちらかと	ほとんど	どちらかと	
O中 29人	18 (62.1)	10 (34.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (3.4)
	28 (96.6)		0 (0.0)		
P中 36人	6 (16.7)	9 (25.0)	11 (30.6)	8 (22.2)	2 (5.6)
	15 (41.7)		19 (52.8)		
Q中 20人	2 (10.0)	5 (25.0)	8 (40.0)	4 (20.0)	1 (5.0)
	7 (35.0)		12 (60.0)		
R中 17人	10 (58.8)	4 (23.5)	2 (11.8)	0 (0.0)	1 (5.9)
	14 (82.3)		2 (11.8)		
X高 48人	8 (16.7)	10 (20.8)	17 (35.4)	12 (25.0)	1 (2.1)
	18 (37.5)		29 (60.4)		
Y高 14人	2 (14.3)	2 (14.3)	6 (42.9)	2 (14.3)	2 (14.3)
	4 (28.6)		8 (57.1)		
Z高 41人	8 (19.5)	4 (9.8)	18 (43.9)	10 (24.4)	1 (2.4)
	12 (29.3)		28 (68.3)		

資料2 鹿児島県総合教育センター研究発表会(141人)

※ゴシックは、「ほとんど」「どちらか」との合計、()は%

	立つ		座る		その 他
	ほとんど	どちらかと	ほとんど	どちらかと	
小学校 68人	32 (47.1)	24 (35.3)	2 (2.9)	2 (2.9)	8 (11.8)
	56 (82.4)		4 (5.8)		
中学校 46人	13 (28.3)	11 (23.9)	14 (30.4)	5 (10.9)	3 (6.5)
	24 (52.2)		19 (41.3)		
高等学校 10人	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (50.0)	4 (40.0)	1 (10.0)
	0 (0.0)		9 (90.0)		
特別支援学校 17人	3 (17.6)	2 (11.8)	6 (35.3)	2 (11.8)	4 (23.5)
	5 (29.4)		8 (47.1)		